

科学は君たちの人生を豊かにする

高部英明

(本原稿は岡山県立玉島高校のSSH 発足シンポジウムで表題のパネル討論会の基調講演を文章にしたものである。一部加筆した。070607/09)

私は大分県の中津南高等学校という田舎の高校から大阪大学に入学しました。中津は1万円札の福沢諭吉のふる里で、中津市も彼の生家を誇らしく観光地にしています。しかし、彼の『福翁自伝』(岩波文庫、講談社文庫)を読むと、中津が封建的で「封建主義は親の敵」と書いているように、大嫌いで、大阪の適塾に逃げ出した。私も田舎の封建的で非論理的なところから逃げるように大阪に来た(それでも、この年になると田舎が懐かしい)。諭吉は大阪でがむしゃらに勉強しました。その有様は『福翁自伝』に活写されています。君たちも是非一度読んでみてほしい。

受験勉強からの解放と反発からか、大学に入学して3年間は理系の勉強はほとんどせず、小説、随筆、歴史、政治、哲学など人文系の本を熱心に読みあさりました。講義をさぼって読みましたから出席率も悪い、が、何とか留年せずに卒業できました。哲学では特に唯物論的哲学。レーニンの『国家と革命』を読んで興奮したことをよく覚えています。この頃の読書は私の思考の原点になっており、現在の自分の背骨の一部になっています。大学での3年間は「自分探し」の貴重な時間でした。

4回生で物理と出会い、研究者への道を選び、学位取得後ミュンヘンのマックスプランク研究所に研究員として滞在しました。女房が旅行好きで、1年間に有給休暇や週末、祝日を利用して、13カ国を旅行しました。女房が全て企画し、私は荷物持ちとしてついて行くだけ。しかし、お陰で沢山勉強しました。その中で特に印象的だったのがイタリア旅行。各地でルネッサンスの息吹を体感しました。ルネッサンスは14-16世紀に起こった「人間回帰」の芸術運動であり、それは「真実とは何か」という問いを素直に表現した動きでした。中世宗教ドグマからの解放、ありのままを表現しようということでした。象徴的には宗教画の「キリストを抱くマリア」の絵に現れています。中世絵画ではキリストは、体は赤ちゃんだが顔は大人の顔に描かれている。それが、ルネッサンス期には顔も赤ちゃんのそれに素直に描かれるようになった。このルネッサンスという芸術活動が、「真実を追究する」という本来の人間を取り戻し、ガリレオの地動説に至る原動力となりました。ガリレオも中世ドグマに対する挑戦をしたのであり、それが、近代科学を生むことになりました。

それから400年、物理学は真実を追究し、それを論理的に客観的に探求していくすべての学術のひな形の方法論を構築してきました。私はその物理学に携わることで、何を見てもその背景にある広い真実の世界に想像を巡らすようになったのです。科学を学ぶことの原点は「なぜ、なぜ、なぜ」と疑問を重ね、物事の原点を探ることです。それは、「なぜ自分はこの世に生を受けたのか」、「自分は社会の中でどのような存在であるのか」という「自分探し」の道標を与えてくれます。科学を学ぶことは人生最大の目標である「自己実現」へのプロセスです。君たちも科学を学び、心豊かな人生を送られることを願っています。